

令和 2 年 4 月 7 日現在

機関番号：12102
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2017～2019
課題番号：17K04442
研究課題名(和文) 性的アディクションに対するリスクアセスメント・ツールおよび治療プログラムの開発

研究課題名(英文) The Development of a risk assessment tool and a treatment program for sexual addictions

研究代表者
原田 隆之 (Harada, Takayuki)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：10507742
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：性犯罪などの性的アディクションについて、そのリスクアセスメントツールと治療プログラムの開発を行った。リスクアセスメントツールとしては、世界中で広く用いられているStatic-99の日本語版を開発した。医療機関で治療中の性的アディクション患者を対象に実施し1年後の再犯の有無を観察したところ、リスクレベルが高くなることに再犯率も高くなっていることがわかり、十分な予測的妥当性が見い出された。
治療プログラムは、認知行動療法を基にして既に開発したプログラムを修正し、臨床試験を実施した。その結果、治療を受けた患者の治療終結時のコーピングスキルが有意に向上していることが示され、一定の効果が見い出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性犯罪は被害者に多くの身体的・心理的傷を負わせ、社会的にも大きな問題をもたらすものであるが、処罰だけでは再犯防止への効果が限定されている。これまで世界的にも研究が少ないが、心理学的な理解を深め、効果的な対処を取ることが必要である。

本研究は、性犯罪者の再犯リスクの大きさを測定するリスクアセスメントツールを開発し、そのスコアが再犯を予測することを実証した。さらに、性犯罪者に対して認知行動療法と呼ばれる心理療法を実施し、その効果を検討したところ、一定の有意な効果が見い出された。これらの成果を活用することによって、処罰に加えて心理学的な治療を実施することで性犯罪を効果的に抑制することが期待できる。

研究成果の概要(英文)： A risk assessment tool and a treatment program were developed for sexual addictions including sexual offending. As the risk assessment tool, the Japanese version of the Static-99, which is the most widely used in the world, was developed. The participants were sexual addiction patients who were receiving treatment in a medical institution and relapse events were observed for one year. It was found that the higher risk level was associated to the higher relapse rate, indicating the enough prospective validity of the tool.

As for the treatment program, the existing program based on the cognitive-behavior therapy (relapse prevention model) was modified and the clinical trial was conducted. The results showed that coping skills of treated patients were significantly improved and therefore the effectiveness of the program was demonstrated.

研究分野：臨床心理学

キーワード：性犯罪 性的アディクション 認知行動療法 リスクアセスメント リラプス・プリベンション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

DSM-5 の嗜癮性障害の概念が大きく変更され、行動嗜癮に大きな関心が寄せられている。なかでも性犯罪を始めとする性的アディクションは、社会的な問題であるが、処罰的な方法だけでは再犯の抑制が困難であることもわかっている。また、わが国では、痴漢、盗撮など諸外国ではまれな性犯罪が際立って多く、わが国独自の研究が必須である。

こうした性犯罪に関しては、刑務所内では治療プログラムの実施が始まっているが、社会内における治療の試みはきわめて限定的であり、本人が治療を求めてもそれを提供できる医療機関はほとんどない。効果的な性犯罪、性的アディクション対策として、臨床心理学の知見を活用した対策を講じることは喫緊の課題である。

これまでも私は、性犯罪者リスクアセスメント・ツールの開発(原田・野村他, 2013; 北條・原田, 2014)を行うとともに、認知行動療法に基づいた治療プログラムを開発し、精神科クリニックにおいて試行的実施を重ねている(細谷・原田他, 2010; 2011, 北條・原田他, 2012; 原田, 2015)。今後は、これらアセスメント・ツールと治療プログラムを組み合わせ有効な治療プロトコルを開発し、対象者のリスクレベルに合わせた治療プログラムを開発したうえで、その効果を厳密な方法によって検証する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、性的アディクションについてリスクアセスメント・ツールと認知行動療法に基づく治療プログラムを開発し、その効果を検討するものである。アディクションであるという性格を考えると、刑罰だけで対処するには限界があり、効果的な治療を合わせて実施することで、再犯の抑制につながることを期待できる。具体的な目的は以下のとおりである。

- (1) 性犯罪者のリスクアセスメント・ツールを開発する。欧米では、実証的に導かれたリスク因子の有無を測定するためのリスクアセスメント・ツールが盛んに用いられている。先行研究やわれわれの試作版を元に、より信頼性・妥当性の高いツールを開発する。
- (2) これまでに開発した薬物依存症治療プログラムや刑務所内で実施されている性犯罪者治療プログラムを参考にし、社会内のクリニックで実施可能な治療プログラムを開発する。
- (3) そのプログラムをクリニックにおいて実施し、対照群と比較して効果を検証する。

3. 研究の方法

(1) リスクアセスメント・ツールの開発

すでにわれわれが開発しているパイロット版は、海外で最もよく用いられている性犯罪者リスクアセスメント・ツールである Static-99 (Hanson & Thornton, 2000) を元に作成したものであるが、これをわが国の文化や性犯罪者の特性を考慮したうえで修正する。それを、研究参加者 150 名に配布し、リスクレベルの判定を行う。同時に、デモグラフィック変数や性犯罪の態様(初発年齢, 罪名, 被害者の特性, 逮捕回数), などについての情報を質問紙で収集し、リスクレベルとの関連を検討する。前年度質問紙配布の 1 年後に、再犯の有無について、本人、家族からの情報を収集する。リスクレベルと再犯の有無についての関連を検討し、予測妥当性の検討を行う。

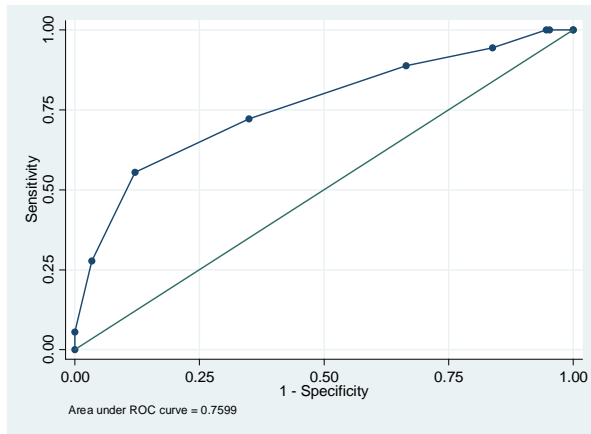
(2) 治療プログラムの開発

治療プログラムは、アディクション治療のスタンダードであるリラプス・プリベンション・モデルに基づいて開発し、共感性訓練、マインドフルネス訓練、グッドライフモデルの要素を組み込んだ 20 セッション程度のものとする。参加者 140 名のうち半数にプログラムを実施し、残り半数は治療待機群として自助グループ的討議等を実施する。プログラム開始前に、全員にリスクアセスメント・ツールを用いてリスクレベルの査定を行う。評価にあたっては、1 年間の再犯、コーピング・スキル、責任の自覚、共感性、ソーシャル・スキルなど予後予測因子がどう変化したかを検討する。特に、リスクレベルと再犯およびこれら心理的変数の変化との関連について詳細に検討する。

4. 研究成果

日本語版 Static-99 の信頼性および妥当性を検討した結果、信頼性については、Cronbach's $\alpha = 0.88$ が得られ、十分な値が示された。予測的妥当性については、高リスク、低・中リスク、中・高リスク、高リスクの 4 群において、1 年後再犯率に有意差が見られ ($\chi^2(3) = 14.43, p < 0.01$)、残差分析の結果、高リスク群の再犯率が有意に高く、低リスク群の再犯率が有意に低いことが示された。さらに、AUC = 0.77 (95%CI = 0.63-0.89) と十分な値が得られた。この結果から、十分な妥当性を有するツールが開発されたといえるが、これまでもっぱら西洋諸国で妥当性が検証されてきたリスクアセスメント・ツールが、わが国でも同様に適用可能であることが示されたことによって、文化的・社会的背景が異なっても、さらには性犯罪の態様が異なっても、同様のリスク因子によって将来の再犯が予測できることが示された。

治療においては、先行研究のエビデンスに基づき、認知行動療法、中でもアディクシ



ン治療に特化した治療アプローチであるリラプス・プリベンション・モデルによる治療プログラムを開発した。プログラムは、1)性的問題行動のハイリスク状況の同定、2)ハイリスク状況へのコーピング訓練を主な治療要素とし、ほかにも生活スケジュールの策定、自己モニタリング、渴望コーピングなどから構成された。

上記プログラムを用いて、首都圏の精神科クリニックにおいて性的アディクションの男性140名の性的アディクション患者を対象にして、参加者を登録順に治療群に割り振り、残りはウェイトリングリスト・コントロールとし

たうえで、非ランダム化比較試験を実施した。その結果、リラプス率に有意差はなかったが ($p=0.68$, $OR=1.02$, $95\%CI=0.14$ to 7.42), 治療出席数は治療群が有意に多く ($t(118)=5.84$, $p<0.01$, $d=1.00$, $95\%CI=0.64$ to 1.36), コーピング・スキルにおいて群・時間の有意な交互作用が見られ ($F(1,77)=8.93$, $p<0.01$), Bonferroni 法による多重比較の結果、治療群のスコアが治療後において有意に上昇したことが示された。

これらの結果をまとめると、本研究は、痴漢や盗撮などの性的アディクションを対象とした世界で初めての臨床試験であり、わが国で初めてのコミュニティ内における性的アディクション治療の臨床試験である。わが国の文化・社会的影響を受けた性的アディクションに対するアセスメントや治療プログラムを開発し、その効果を検討することによって、多様な性的アディクションに対する理解を深めることができたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原田隆之	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 性的アディクション：その現状と治療	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 181-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田隆之	4. 巻 61(3)
2. 論文標題 強迫的性行動症	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 277-284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田隆之，野村和孝，嶋田洋徳	4. 巻 56
2. 論文標題 性犯罪者リスクアセスメントツールの開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 犯罪心理学研究	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田隆之	4. 巻 73
2. 論文標題 ストーカー犯の特徴とその対策：犯罪心理学的見地から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代性教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 原田隆之	4. 巻 195
2. 論文標題 エビデンスに基づくアディクション臨床：その現在と未来	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 97-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田隆之	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 性的アディクション：その現状と治療	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 181-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 3件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 原田隆之
2. 発表標題 性的アディクションの理解と治療：「痴漢外来」の実践を通して
3. 学会等名 日本精神神経学会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田隆之, 野村和孝, 嶋田洋徳
2. 発表標題 性犯罪者リスクアセスメントツールの開発
3. 学会等名 日本犯罪心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Harada, T & Hojo, M.
2. 発表標題 Risk factors for paraphilic offenders in Japan.
3. 学会等名 51st Annual Convention of Association for Behavioral and Cognitive Therapies. (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田隆之
2. 発表標題 アディクションへの認知行動療法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田隆之
2. 発表標題 犯罪・非行の心理とその対処：エビデンス・ベイスト・アプローチ
3. 学会等名 日本カウンセリング学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 原田隆之	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本医事新報社	5. 総ページ数 256
3. 書名 現代社会の新しい依存症がわかる本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----